

（西暦）2023 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

看護師の死期予見に関する探究

学位の種類： 修士（看護学）

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 22894701

氏 名：神谷 綾子

（指導教員名：習田 明裕）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

【研究背景】

我が国は、総人口が減少し、高齢化率はさらに上昇を続け、未曾有の少産多死社会を迎える。多死社会は多くの死だけでなく、その看取りに立ち会った家族や介護者も増加し、残された者の心のケアも大きな課題となる。病院医療のひっ迫が懸念される中、国は病院外の看取りを推進し、国民の最期を迎える場は、さまざまな場所へと広がり、看護師に期待される役割は大きい。看護師が看取りに際し、家族も含めた細やかなケアを実現するために、患者がいつ息を引き取るのか、予測することは、重要なことである。予後予測に関する研究やエビデンスは、がん患者に特化し、医師により国内外で確立されつつある。しかし、死亡直前の数日から数時間に関する予測は、臨床所見は多いものの明確な徴候の出現には個人差があり、医療従事者は、患者の死が差し迫っているかどうか判断に苦慮している。医学的データを重視する医師において、予後予測が実際よりも長くなることが知られており、看護師の方が医師よりも予後予測が正確であったという報告もある。医師が医学的データを中心に患者を捉えているのに対し、看護師は医師の有する知見と合わせ、患者を全人的に捉え、観察を続けている。このような看護師特有の視点が、予後予測の質を高めている可能性があるのではないだろうか。臨死期の看護師が死を予見した内容を明らかにすることは、全人的な看護師の視点から死を捉えることを明らかにするものであり、死期を予測する上で、新たな指標となり得ると考える。また、予見を導いた背景を知るとは、患者や家族が望む、身体的なケアだけではなく、より広くとらえられた最期のケアを知ることにつながる。

【研究目的】

本研究は、看護師が、患者の死の数日から数時間前に死期を予見した内容とその予見を導いた背景を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

看護師経験年数 5 年目以上、終末期看護の経験 3 年目以上の看護師に対し、半構成的面接を実施し、質的記述的に分析を行った。対象者の抽出方法は、機縁法及びスノーボースサンプリングで行った。データ収集期間は、2023 年 4 月～2023 年 9 月であった。

（データの分析方法）

1. 録音したインタビュー内容を忠実に逐語録にした生データを繰り返し読み、研究対象者が、(1)患者の死期を予見した内容、(2)予見の背景として読み取れる箇所全てを分析対象とした。
2. 意味が損なわれないよう生データの表現を重視し、一文に一つの意味内容が含まれる

よう抜き出したものを初期コードとした。

3. (1)患者の死期を予見した内容、(2)予見の背景について、前後の文脈の意味を重視しつつ、初期コードの抽象度を上げサブコードとした。その際、「予見の背景」となる視点が何から生じているのか、看護師が患者をどのように捉えていたのか、看護師と患者の関係性の中から見出せる要素はないかなど、前後の文脈の意味を汲み取った。
4. (1)(2)それぞれについて、サブコード化したものの共通性と相違性を比較して類型にし、抽象度を上げてコードとした。
5. (1)(2)それぞれについて、コードの内容を比較、修正、精練を繰り返しサブカテゴリーとして抽出した。
6. それぞれのサブカテゴリーの関連を検討し、カテゴリーを抽出した。

分析の過程において、質的研究の専門家にスーパーバイズを求めるとともに、複数の研究者と検討を繰り返すことで、分析の真実性の確保に努めた。

なお本研究は、東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認（承認番号 22091）を得て実施した。

【結果】

本研究では、11名(男性2名、女性9名)から協力が得られた。研究対象者の属性は、年齢30代4名、40代5名、50代2名であった。看護師経験年数は、10年～38年(18.9年；平均値,以下同様)、終末期看護の経験年数5年～28年(15.8年)であった。

死期予見のエピソードとして、11名より計21エピソードが得られた。分析の過程で、亡くなった患者が親族であった4名についてのエピソードは、死期予見に至る患者と看護師の関係性が大きく異なり、看護師の個人的な感情や強固な関係性の反映がみられ、他のデータとレベルが合わないことから除外した。また、死期予見について事前に予見したことが明確に語られなかった1エピソードについても分析から除外することとした。よって16エピソードについて内容を分析した。

看護師の死期予見の内容として11のサブカテゴリーから、【看護師が捉えていた患者のパーソナリティーの変化】【患者自身の感覚の変容】【看護師の感覚機能を越えて感知する患者の変容】【看護師が死期と結び付ける患者の周囲の変容】の4カテゴリーが抽出された。

死期予見の背景の内容として13のサブカテゴリーから、【看護師が患者・家族の個別の状態を受け止めよく理解している】【看護師と患者・家族との間に気持ちを分かち合う関係がある】【看護師に患者の看取りに対し強い思い入れがある】【看護師に患者の死期の近さを見極める能力がある】【看護師が自身の死期予見について過去の経験と統合して理解を深める】の5カテゴリーが抽出された。

【考察・結論】

看護師の死期予見とその背景を検討した結果、看護師特有の視点が根拠となる予見には、看護師が患者・家族をありのままに理解し、また必要な情報は能動的に捉え、対象を全人的に理解する【看護師が患者・家族の個別の状態を受け止めよく理解している】が重要な最初の背景であることが示された。さらに【看護師に患者の死期の近さを見極める能力がある】ことで、死期予見は立ち現れ、得ることができ、看護師の深い対象理解が無ければ、気づきに繋がらないことが示された。さらに、看護師たちは患者の看取りを振り返ることで、【看護師が自身の死期予見について過去の経験と統合して理解を深める】ことをしており、経験は、個々の看護師の中で蓄積され、次の死期予見への示唆となっていくことが明らかになった。